

自分自身を鍛える

卒業したF・K君の姿はもうありません。しかし、私は今でも、彼がカバンを片方の肩にかけて、朝一番にせつせと歩いて坂を上っていくような気がします。彼が、私を鍛えてくれた一人です。

旧瑞陵中時代からですから、四年間になりますね。私は毎朝七時過ぎから、中央道ガード下の交差点に立ちました。宿泊研修の時だけは立てませんでした。それ以外は毎日立ちました。出張があっても、生徒たちの登校を見届けてから出張先に向かいました。

正直言って、くじけそうになった時がありました。遠方への出張があるということでした。たまたまとして、だれも何も言わないだろうと弱さが出かけたこともありました。立っているだけで汗が滝のように流れ落ちる夏、「さあ、行くぞ」と自分を鼓舞して寒さの中に飛び出していった冬、そして、花粉で目がかゆくなるとわかっているにもかかわらず、花粉で目がかゆくなるとわかっているにもかかわらず、そんなつらい思いをすることはなかったことでしょう。

それをやめさせなかったのが、朝早く登校する生徒たちです。一番に登校してくる生徒は年々違っていました。その生徒たちがいっつも時間に登校してくると思うと、自分に鞭打っている場所に向かっています。そして気付いたら、もう四年が経っていました。その最後の生徒がF・K君です。

私は毎朝六時四十分に出ます。その時から、すでにF君を意識しています。一日市場交差点を通過するとき、学園台のバスが前を走っていると気もちが焦ります。なぜなら、その十二、三分後には、F君が学校に一番に到着するからです。

彼の歩くスピードは普通ではありません。家を出るのが少し遅くなると、そのスピードが私に大きなプレッシャーを与えます。そう考えると、暑いとか寒いとか、はたまた、「目がかゆくなるかも」などと、考える余裕はありません。彼が学校に到着する時間が、私に無言のプレッシャーをかけるのです。

毎朝交差点に立つという私のルーティーンは、彼のおかげで当たり前となりました。朝立つのがつらいなんて思っている暇はありません。彼のおかげで、私は毎日鍛えられ、くじけることなくここまでやってこられたのだと今は思っています。

決意集会を受けて生徒の皆さんが書いた「ROAD TO 2022」の掲示の横には、三年主任のY教諭の言葉が添えられています。「三年生が強く見えたのは、当たり前前を重ね、自分を鍛えていたからだと思います。時間を守ることに、あいさつ、自分から質問。意識から無意識へ、そして、当たり前前へと進化させ、『自分』は自分自身の手でたくましく鍛えてください。」

私は、F・K君の存在を刺激にして自分を鍛えました。彼は、そんなことは夢にも思っていないでしょう。中学校というところは、支えを借りながら自分自身を鍛えるところです。（三月十五日 記）